

文化財学習会

ふるさと探訪

テーマ 国分寺町で石仏に出会う道を歩く

講師 渡邊 誠（高松市文化財専門員）

平成22年2月28日（日）

共催 高松市歴史民俗協会
高松市教育委員会

国分寺町で石仏に会い道歩く

今回のふるさと探訪は万灯山（狭箱山）・伽藍山の北西麓、国分寺町新居の万灯と呼ばれる地域を歩くコースです。この地域は古くから交通の要所として、歴史が蓄積されてきたところです。今回の探訪ではこうした交通に加え、この地域で活躍した人々にゆかりのある場所や信仰に関わる地点を廻りながら、地域の歴史やこの土地が生み出した人々の想いにふれてみたいと思います。



石 仏



やぶつばき



萬燈寺 薬師堂

1

道饗神社と狭箱橋

みちあえじんじゃ はぎこぼし

香東から来る人々は狭箱の峠を越えて国分寺や白峰へと向っていた。この道は参詣道の一つである。この峠には主要な道筋の地域境や道の分岐点で道を守り、旅の安全を祈るとされる神と言われる、八衢やちまたの神を祀る道饗神の石祠があり、古くからの交通の要所であったことの名残を今も残している。この道饗神社みちあえでは9月に東下所の陶屋がお祭りをする。

この道饗神社を抜けて、本津川を渡る場所に狭箱橋があり、それを渡って、旧国分寺町役場（現北部公民館）の南までは町道が残



道 饗 神 社

2 万燈新居氏と末澤城跡



住宅地に残る石碑



図9 末澤城跡現況図

「末澤」の姓を賜った。その後、15代資親は鹿角町に法恩寺を建立し、現在も末澤家、新ノ居家は法恩寺が檀那寺である。江戸末期には28代文左衛門が新居姓に改めたとされているが、万燈地区には末澤姓が多く、新居姓は一軒のみである。

「末澤城由来記」によれば、「我が城の様子を見るに堀の幅僅か三間又は二間余なり。

新居藤太夫資光
の末子大隈守資秀
の次男十郎秀親が
万燈川の南に城を
構えたのが万燈氏
の始まりとされる
(新居氏蔵「末澤城由
来記」より)。14代
資忠の時に応仁の
乱で細川勝元に属
して軍功を挙げ、

矢倉を只、柱四本立て二重三重に柵をくみ、四方に板をかき付けたる計りにて屋根と
言う事もなし。只矢倉と同じ。又処々の大身小身の城、皆此通りなり、大体は兵七、
八十也。百人は希也」とあり、戦国時代の城構えの状況を想像することができる。旧
状を留めていた石積みも現在では確認できない。そこに大手の門構えがあったとされ
ており、宅地内には7つの泉があったとされる。北西隅に屋敷神の小祠がある。御神
体として万燈寺薬師如来の分霊が祀られている。また、万燈神社の背後の小高い箇所
が「シロノヤマ」と呼ばれており、詰の城の存在を推測させる。

3 真教寺

ふこくさんしょうりんいん
附谷山正林院

真宗興正派

本尊 阿弥陀如来立像

「ここは万灯の真教寺か、御所のお庭か、極楽か」と謳われたように現在も真教寺
にはその当時の面影が残っている。古くは正林坊と称していたと言われている。

新ノ居家文書によれば、正林坊は末澤城東側に万燈新居氏の菩提寺として建立され、
永正9年（1512年）に万燈新居氏のもう一つの居城、鹿角城（現高松市）の北側
に移され、法恩寺としたとされる。その後も法恩寺の末寺として存続していたが、天

正7年（1579年）に兵火によって堂宇が焼失し、天和年間（1681〜3年）には無住となり、旧跡に五輪塔が残るのみとなっていた。

その後真宗寺院として再興され、寺では道恩を中興の祖としている。嘉永7年（1854年）「讃岐國名勝図会」には、享保15年（1730年）に再興したとある。1

8世紀の初めには、城の南西の山麓に当たる現在の地に真教寺として存在していたことが新ノ居家文書からも伺え、18世紀には再興していたものと考えられる。幕末から明治初期ごろ火災により境内が全焼し、現在の本堂はその後明治30年（1897年）に再建されたものである。

関連豆知識

佐々木孝丸・・・（1898生）劇作演出家。真教寺住職の三男に生まれる。国分高等小学校卒業のあと、郵便局員、書店員を経ながら、独学で文学・演劇を研究。大正9年（1920年）ミュッセの「二人の愛人」を翻訳、以後フランス文学の翻訳に従事する。新劇運動に参加して、俳優・演出・劇作を兼ね、映画・テレビにも出演する。筆名落合三郎。



万燈神社



万 燈 神 社

祭神は火迦具土命。
ほのかぐつちのみこと

この神社の起源は、当時の国造であった為目昏命が国内の鎮火の神として祀ったことに始まると言われている。

『古今名勝図絵』には「氏宮大明神万堂にあり、社人豊島氏、祭礼9月7日 本社 拝殿 末社荒神」とある。為目昏命は神櫛王の孫である。神櫛王は『日本書紀』（景行天皇4年の条）によれば、景行天皇の皇子で「讚岐国造之祖也」と伝えている。高松市牟礼町にはその神櫛王の墓とされる宮内庁管轄の王墓参考地の神櫛王墓がある。

■ 火迦具土命

火之夜芸速男神／阿遇突智神／火産霊神
ひのやぎはやおのかみ かぐつちのかみ ほむすびのかみ

この神は伊邪那岐・伊邪那美の2神によって生み出された最後の御子神といってよい神で、この神を産んだために伊邪那美は死に、黄泉国に下ることになる（病から6神、死体から8神が生まれる）。夜芸は焼のこと、速は威力を称えた語で、迦具は輝くの意味であり、総じて火

の神を表している。伊邪那岐は伊邪那美が死んでしまったことを哀しみ怒り、十拳劍とつかのつるぎで火迦具土神を斬り殺してしまう。このとき、劍に付いた血から8神が生まれ、火迦具土の死体から8神が化生したと言われている。

5 六地藏

衆生がその業によっておもむく六種の世界、六道。その六道（地獄道・餓鬼道・畜生道・修羅道・人間道・天道）の、それぞれに現れて、衆生の苦しみを救う6体の地藏菩薩。街道筋や墓地入口等に6体並べて安置されることが多い。

個々の名称については地獄道・餓鬼道・畜生道・修羅道・人道・天道の順に檀陀だんだ地藏・宝珠地藏・宝印地藏・持地藏じよがいしよ・除蓋障地藏・日光地藏と称する場合と、金剛願地藏・金剛宝地藏・金剛悲地藏・金剛幢地藏・放光王地藏・預天賀地藏と称する場合が多いが、文献によっては以上のいずれとも異なる名称を挙げているものもある。

6 伽藍山 萬燈寺

【伽藍山：216m】

青光山 せいこうざん 萬燈寺 天台宗

本尊：薬師如来坐像

国分寺町の中で、国分寺・鷲峰寺とともに古い歴史をもつ寺である。寛延元年（1748年）「青光山萬燈寺縁起」・「萬燈寺由来」（新ノ居家文書）によると、当寺の創建は奈良時代、行基菩薩が伽藍山中腹の岩窟に薬師・観音・虚空蔵の3体の石仏を設置したことに始まり、法相宗寺院であったという。その後の様子は明らかではないが、善通寺市大麻瓦窯から出土した瓦と同文の軒平瓦が採集されており、平安時代末期には建物が存在していた可能性が考えられる。また、天文年中（1532年～1554年）に兵火によって伽藍の大部分を焼失したとされる。

元禄8年（1695年）「国分寺末寺帳」によると、天正年中（1573年～1591年）に国分寺の末寺から退転しており、末寺帳が作成されたころには小堂が残るのみであったようである。

さらに縁起には慶安年間（1648年～1651年）頃、土中の光り輝く場所から本尊の薬師如来石仏が掘り出され、寛文7年（1667年）僧道入が岩窟に再び安置

したというが、本格的な再興は松平頼重入府後の亮賢によるものであった。亮賢は頼重公入府後の折に関東より従った算海法印の弟子であり、出羽の出身という。元禄14年（1701年）には高松蓮門院（本門寿院）の末寺となった。

7 伽藍山 薬師堂

薬師堂の岩窟内に薬師如来・虚空蔵菩薩・観音菩薩の石仏が安置されている。

この薬師如来は「身代わり薬師」とも呼ばれ、古くより疱瘡・疫病に靈験あらたかであったという。薬師三尊の光背にはいずれも刻銘があり「開山湖月」「釈梵祥禅師」の名が見える。



磨崖仏 不動明王

伽藍山には岩場が多く修験の道場としても古くから信仰を集めていた。戦後になって伽藍山山頂に石鎚大権現を勧請し、毎年1月10日と8月10日には山頂から中腹さいとうの護摩場に御分霊をおろして大採灯護摩が行われている。

西行塚の後方の大岸壁には地元の石職人の西岡清氏によって刻まれた不動明王の磨崖仏がある。

西行塚

西行塚は背面に刻まれている詩を読んだ山崎村在住の東阿老人によって1762年に建立された石碑である。また萬燈寺本堂には東阿老人手製と考えられる位牌も祀られている。

(寸法) 高さ90×幅39×厚さ29cm

(正面) 「西行塚」

(背面) 「玉藻東阿老人 山水の浅き心も
西へ行 契を君に結ぶ嬉しさ」

(右側面) 「建久元庚戌天二月十六日遷化
宝曆十二壬午春二月十六日建之」

※建久元年は西行の歿年。

※遷化は高僧が亡くなったことをいう。

十三仏

十三仏とは仏の世界にあって、死者の罪業を裁判する十王に三王を加えたものの本
地仏で、不動明王(秦広王)・観世音菩薩(平等王)・釈迦如来(初江王)・勢至菩薩(都市
王)・文殊菩薩(宋帝王)・阿弥陀如来(五道転輪王)・普賢菩薩(五官王)・地藏菩薩(閻



西行塚

魔王)・弥勒菩薩(變成王)・虚空蔵菩薩(慈恩王)・薬師如来(太山王)・大日如来(拔苦王)・爾如来 (蓮上王)がそれにあたる。密教では、普遍的に信仰された諸尊を集約する。

これらの十三仏は人々の救済にあたるとされ、その信仰は南北朝にはじまり室町から江戸時代に追善供養の本体として盛行した。この萬燈寺の十三仏は、薬師堂横の祈念の碑によれば、18代住職真良が昭和16年に支那事変に際して建立したものである。

8 北海道と唐渡峠からと

唐渡峠は伽藍山と六ツ目山の間を抜ける峠の道で、その往来は古く、国分寺町域を走る主要幹線道路の一つである。唐渡峠から東へ下りたところに川原遺跡があり、古代の幹線道である北海道と考えられる道の跡が確認されている。北海道の推定地は諸説あ



るが、この唐渡峠を通るルートも有力な候補のうちのひとつである。

そもそも唐渡とは空洞の意の「から」、門すなわち「出入口」、「狭くなった所」を意味するという「と」という組み合わせから、「切り通し」のように、山の急斜面が道の両側に迫り、狭くなった所を指す地名と言われている。また、唐渡とはコロタワがカラタワに変化したものが語源で、荒れた地味の峠という意味であるとも言われている。いずれにしても高松から西へ、西から高松へと抜ける主要な交通の要所であったことには間違いないであろう。

【参考文献】

『さぬき国分寺町誌』平成17年3月発行

国分寺町

『檀紙村誌』昭和61年10月10日発行

檀紙村史編集委員会

